

みんなの只見線

最終回

只見線地域コーディネーター

酒井 治浩
さかい はるこ

スタートライン

いきなりだが、私は走るのが苦手だ。小さいころから短距離も長距離も苦手で、陸上競技で一位をとったことはない。マラソン大会はいつもたいてい最後にゴールしていた。ゴール付近の声援を遠くに聴きながら最後に走りぬけるのはとても恥ずかしくて、どうしたらマラソン大会を休めるか真剣に考えていたが、結局毎年走り切っていた。

中学生になり、まわりの人々が途中で疲れて歩いたりしている中、遅くても走り続けていると少しずつ順位が上がっていった。まわりの人は私よりも足が速かったから本気を出せばすぐに追い越されてしまふけど、それでも止まらずに走り続けた。遅くても走り続けているうちに、だんだんと速く走れるようになるのが

嬉しかった。今はおそらく1km走るのも難しいだろうが、今の町下庁舎から田子倉ダム展望台までを往復する駅伝部の練習は、今思い出してもよく走っていたなと思える心覚えの一つだ。

当時私に走り方を教えてくれた先生は、足が速くもない私によく声をかけてくれ、走り方や息継ぎの仕方などを教えてくれた。絶対にたどり着けないと思っ走り始めても、一歩ずつ進んでいけばゴールにたどり着くんだという強い気持ちで前に進むことを教えてくれた。

只見町へ、十一年二か月ぶりに会津若松から只見線が帰ってくる。その分私たちも年をとり、只見町も少し寂しくなった。それでも地域住民だけでなく、只見線の復活を願

って応援してくれた大勢の人たちが、新たな只見線の歴史のはじまりを喜んでくれている。

現在只見町は人口四千人を切り、小学校では複式学級が増え、町の県立高校は山村留学生を迎えながら維持している。子どもが一人か二人しかいない集落もあり、軒数が一桁の集落もある。

二十年前の私は、この町には絶対に帰らないと決めていた。帰ってきてからも二、三年したらすぐに外へ出て行くうと思っていた。一度ふるさとを離れて帰ってきた人が経験するような再発見をし、それまで見えなかった風景が見え、子ども時代には感じなかった地域の良さや難しさを私も経験した。

町に帰ってきてから三年

後、私はこの町で暮らしていくことを決めた。どこにいてもやりたいことを続けるのはとても難しいことだけれど、義務ではなく責任をもって次の世代にこの町を引き継いでいこうと思っている。ここには町の歴史を知り地域を支えてきた人がたくさんいる。自分の地域を守っていこうと頑張っている若い世代もまだまだいる。

これから、只見線に無理にでも乗らなければいけないか。——いいえ——

地元の人にも只見線に乗ってほしいか。——はい——

なぜなら人は知らないものに対して抵抗感を持つが、一度知ったら少しずつでも興味を持ち、だんだんと好きになるものだから。

なぜなら、只見線を応援している人とひとたび列車で知り合えば、わたしたちがどんなに素晴らしいところに住んでいるかということは何度も聞かされ、魔法にかけられた

ような気持ちにさせてくれるから。

子ども時代の私がマラソンを途中であきらめなかったように、みなさんもこの地域で生きることをあきらめないでほしい。乗ったり、撮ったり、関わればその分だけもっと好きになるのが只見線だと私は思う。学び、暮らし、知ればもっと好きになる只見町と同じように。

みんなの只見線、みんなの只見町のだから。

